函南・桑原に八巻里

山木一族が移り住む？

源頼朝が贖罪で寄進　神奈川の八巻さん新説

伊豆へ流罪中に源氏再興を願い挙兵した源頼朝の最初の標的で、館とともに焼き討ちされた伊豆目代・山木判官平兼隆。主の亡き後に一族は伊豆国山木（伊豆の国市）から秩父（埼玉県西部）山中に逃れたとされるが、実は近くの函南町桑原に一時移り住んだ―と新説を唱える人がいる。桑原に平安時代に創建された箱根大権現と金剛王院東福寺（当時は神仏混交）末寺である新光寺の縁起や、鎌倉時代作で江戸時代に修復された仏像内の墨書に桑原の一部を「八巻里」と称した記述がある。新光寺は後に衰退するが、頼朝は兼隆を殺めた贖罪や怨霊から逃れるため同寺を再興、八巻里を寺に寄進したと説く。

（文、写真　特別編集委員・森野宏尚）

新説を唱えるのは神奈川県秦野市の山木兼隆研究会代表の八巻正和さん（73）。兼隆の位牌（鎌倉時代末期と江戸時代中期作製の二つ）発見や、国学院大教授だった故・樋口清之さんが「位牌は本物」と鑑定したことをきっかけに誕生した八巻同族会の会員から研究会を立ち上げた。

一族に関する調査・研究をする中、疑問も湧いてきた。韮山から秩父山中に果たして逃げるだろうか。主が討たれたとは言え、まだ数年は平家の世、山木と桑原は直線距離で約7キロ。国衙がある三島に近い方がより安全なはず。八巻さんは頼朝伝弘仁八年造営大伽藍今造営有七百有余之僧舎頼朝之時寄附八巻里」とあり、頼朝が箱根三所権現末寺の新光寺を再興した時に、八巻里を新光寺に寄付」と解説した。江戸時代の地誌『豆州志稿』のほか『増訂　豆州志稿』にも同様のことが載る。

かんなみ仏の里美術館小宮根山（桑原山）新光寺は箱根の本山・東福寺を開基した万巻上人が京に上る途次に亡くなり、弟子たちが桑原に開いた平安時代の大寺院だ。七堂伽藍、数百の僧坊があったとされ、桑原には貴重な仏像が多く残り、住民が守り伝え今、かんなみ仏の里美術館に保存・展示中。多くは頼朝の新光寺再興と関わりがある―と鈴木さんは言う。寺はその後、数度の火災で廃絶した。

八巻橋名について鈴木さんは「縁起に『八巻』と出てくるため歴史に詳しい古老らの提案で橋名にしたのではないか」。八巻さんはかんなみ仏の里美術館図録『桑原薬師堂の仏像』の中に、ほかにも「八巻里」と書かれた箇所を探し出した。①鎌倉時代作で、江戸時代に修復された桑原・平清寺本尊の重要文化財・阿弥陀如来座像の納入奉加帳（元禄8＝1695＝年）に『寺領被寄附当国八巻里坊舎槃栄』②明治18＝1885＝年の仁田村など地誌調に『長源寺曹洞宗深谷山号す字禰宜寺ニアリ…源石府二寄附スル二八巻ノ里ヲ』など。①は実慶作で、北条時政が近くに墓がある嫡男・宗時のために造立した―との説もある。

このことから「少なくとも頼朝の鎌倉時代初期から元禄8年まで510年間は八巻里が存在した。江戸期の里名変更は考えにくく、明治維新まで700年ほど八巻里と称されたとも考えられる」と推測した。

古道の日金道近くにある八巻橋。昭和初めの建設だが、新光寺縁起にある「八巻里」から名前が付けられたとみられる＝函南町桑原

1180年8月、三嶋明神祭礼日に頼朝の命で北条時政率いる武将が攻める山木兼隆館。右端が兼隆（浮世絵師・一恵斎の版画、伊豆市の故・高橋三朗さん収蔵）

新光寺縁起や仏像内に里名

頼朝の監視役である山木判官兼隆の姓は伊豆国山木から取ったもので、当初地名は山木、八牧、八巻などの漢字が使われた。鈴木勝彦さんは函南の下の寺のため箱根三所権現に寄付したことにもなる。平家を倒し、源氏全体を指すものではなく、新光寺があった一帯（仏の里美術館周辺）を指す地名との見方をする。

鈴木さんは新光寺縁起『吾妻鏡』に桑原の地名が出てくることから桑原を再興できたのは崇敬していた箱根三所権現のおかげで、荒れ果てていた新光寺を再興して寺が維持できるよう八巻里を寄付した」。

頼朝が再興した新光寺の礎石とされる石。七堂伽藍の大きな寺で、僧坊は数百あったといわれる＝函南町桑原

ただ鈴木さんはじめ桑原の人たちは八巻里の名称は古記録に残るが、これが韮山の山木を追われた山木兼隆一族が桑原に移り住んだ証拠とは思っていない。鈴木さんは頼朝との関わりのほか「北条時政の長子・宗時が石橋山の戦で討たれ、大竹（桑原の隣接地）に墓があり、菩提を弔うために時政も新光寺建立に関わったのではないか」と…。

だが八巻さんの見方は違う。「源氏再興の礼なら頼朝が崇敬していた箱根権現へ直接寄進するはずだ。東福寺の末寺である新光寺を再興、八巻里を末寺へ寄進するとは考えにくい」。また「頼朝の本意は山木一族が身を寄せた八巻里、衰退した新光寺の再興にあった。宿願の源氏再興をかなえたとはいえ、1年半ほど流罪人仲間の隣人として共に過ごした兼隆を殺めた贖罪や怨霊逃れから、八巻里や新光寺を再興したと考える方が違和感がないように思う」

山木一族は1180（治承4）年8月の山木館の夜襲後、83（寿永2）年7月の平家の都落ち、85（元暦2）年3月の平家滅亡、源氏の世となるまで少なくとも3～5年は桑原に住み、後に福島や山梨などに拡散、隠棲した―と八巻さんはみる。

兼隆の伊豆流罪　真相は「親政」

頼朝、文覚、信兼　同じ上西門院衆

八巻さんは言う。「現在、多くの歴史家や歴史愛好者は、頼朝と兼隆（父・信兼も）を敵対関係と捉え、兼隆は山木では神が、息男・兼隆の仇敵である頼朝憎しより天皇を中心とした親政を重んじた行動と捉えている」

そもそも歴史をさかのぼり、こんな見方をする。信兼は山木館夜襲後、平家西走（都落ち）に同道せず、頼朝軍の義経に恭順して木曽義仲を追討。信兼の真意は知れない命の近臣五人衆②同時期に伊豆に流罪となった文覚（現在の伊豆の国市奈古谷へ）や頼朝、兼隆の3人は頼政の知行国内へ皇の幽閉に手を汚すまい皇の清盛の策謀する後白河法使の兼隆を伊豆に遠ざけたのではないか」

その上で「頼朝、兼隆、文覚の3人は後白河法皇と姉の上西門院の〝身内〟で、2人が流罪に深く関わった。他の流罪人と違って厚遇された生活を送り、頼朝と兼隆は1年半余にわたって流人同士の隣人だった。上西門院衆のつながりから親友とは言わずとも、職場仲間〟で、頼朝は兼隆に対し個人的な恨みなどなく、八巻里寄進へ向かっていった」と力説した。

山木館の南側の山王山の中腹にある「山王さん」。八巻正和さんは山木兼隆の墓所ではないかという＝伊豆の国市山木

新年に本出版　「夜襲はなかった」も掲載

八巻さんは伊豆国山木を追われた一族が通説の秩父山中ではなく、一時的に函南町桑原の八巻里に移り住んだ―とする考えのほか、いくつかの新説を含めた著書『新・八巻一族の歴史』の出版準備を進めている。

新説の中には山木館の夜襲そのものがなかった―とする大胆な推理もある。『吾妻鏡』は編者の北条方に都合良く書かれた創作が多い、とした上で次のような論を展開。

夜襲に関しては①源氏側の参加者全員（武士46人、案内人など2人）を含めて殺害されたのではないか―など。

新年早々にも発刊したい意向で、「インターネットや電話で注文を受けたい」という。

参陣できない②山木側は兼隆のほか嫡男の兼光、堤信遠のいわゆる家長のみ3人が闘死、源氏側は死者なし、かすり傷のみ。重大な事柄が隠され、3人は別の方法で殺害されたのではないか―など。

洗い出し、相模以東からは大雨による酒匂川の増水（経験上、早期には水が引かず渡河できない。狩野川も同じ状況？）でたい」という。